

平成 29 年 5 月 29 日現在

機関番号：33109

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2014～2016

課題番号：26381288

研究課題名（和文）PISA読解リテラシーを育成する道徳授業モデルの開発研究

研究課題名（英文）Study to develop a moral lesson model to train reading literacy based on the framework of PISA survey

研究代表者

中野 啓明（NAKANO, HIROAKI）

新潟青陵大学・福祉心理学部・教授

研究者番号：40237350

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、PISA読解リテラシーに基づく道徳授業のモデルを探究した。具体的には、OECDのPISA調査を基に、連続型テキストとしての道徳教材と共に「二つの意見」を提示するという授業モデルを開発した。そのために、モラル・ディスカッション等の他の道徳授業の方法との比較を行った。また、「二つの意見」の作成過程のモデル化を行った。さらに、非連続型テキストを用いた道徳授業の開発を行った。

研究成果の概要（英文）：In this study, we explored a model of moral lesson based on reading literacy in The Programme for International Student Assessment (PISA). Specifically, based on OECD's PISA survey, we developed a lesson model to present "two opinions" together with moral teaching materials as continuous texts. For that purpose, we compared the method with other moral lessons such as moral discussion. We also modeled the process of creating "two opinions". Furthermore, we developed a moral lesson using non-continuous texts.

研究分野：教育学・道徳教育

キーワード：道徳授業 PISA コンピテンシー 読解リテラシー 連続型テキスト 非連続型テキスト 「二つの意見」を用いた道徳授業

### 1. 研究開始当初の背景

OECD が行った PISA (Programme for International Student Assessment) 調査の結果及び OECD の打ち出したキー・コンピテンシー (key competencies) が、学習指導要領に影響を及ぼしていることは、平成 20 年の中央教育審議会答申でも確認することができる。OECD の DeSeCo (Definition and Selection of Competencies) プロジェクトでは、PISA 調査で行っているリテラシーを、読解リテラシー (reading literacy)、数学的リテラシー、科学的リテラシーの 3 つに分類し、読解リテラシーを「自らの諸目標を達成し、自らの知識と潜在的能力を発達させ、社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、用いて、省察するという知的な能力」と定義している。

文部科学省においても、国語科に限定せずに「読解力」の向上を目指した『読解力向上に関する指導資料』を刊行してはいるけれども、指導例の中に道徳は含まれてはならず、読解リテラシーの育成に焦点付けた道徳授業の分析を行うまでには至っていない。

### 2. 研究の目的

前述の研究開始当初の背景で述べたように、従前の研究では道徳授業の中で読解リテラシーを育むための研究が行われていないことに着目し、新潟県中越地方で活動している「中越道徳教育研究会」との共同研究として、先行研究「PISA 型の道徳授業モデルの開発に関する基礎的研究」(中野啓明・中越道徳教育研究会、平成 24 年度新潟青陵大学共同研究報告書：2013 年)に取り組んだ。その結果、「連続型テキスト」としての読み物資料の代表例ともいえる「手品師」及び「泣いた赤おに」を資料として提示するとともに、教師から道徳的価値を含む対立した二つの意見を「意見文」(註：当初は、「意見文」と称していたが、誤解を生じることが危惧されてきたため、研究開始初年度の平成 26 年度から「二つの意見」に変更した)として提示することによって「テキストの熟考・評価」を促すという、読解リテラシーを育むことを目指した道徳授業モデルの開発を行った。

しかしながら、同時に、1) 既存の他の道徳授業モデルとの比較検討の必要性、2) 「連続型テキスト」としての読み物資料に対応した「二つの意見」の作成手法の確立と「二つの意見」の蓄積と公開の重要性、3) 図表等を用いた「非連続型テキスト」としての資料の開発の必要性、も明らかになった。本研究は、1) から 3) の課題を克服することにより、従前の研究では未開拓の領域であった、PISA 読解リテラシーの育成に資する道徳授業モデルの開発を目的とする。

### 3. 研究の方法

研究の目的で述べた研究課題を達成するため、次の三つの方法で研究を行った。

(1) モラル・ディスカッション等の既存の他の道徳授業モデルとの比較するため、文献調査を通じた理論的考察を行うとともに、質問紙調査を通じて従来の道徳授業における課題を把握する。

(2) 「二つの意見」の作成手法を確立するため、実験授業とワークショップの開催を通じて「二つの意見」の作成マニュアルを改善する。また、「連続型テキスト」としての読み物資料に対応した「二つの意見」を蓄積してデータベース化する。

(3) 図表等を用いた「非連続型テキスト」としての道徳資料の開発と公開を行うため、道徳的な価値に迫るための図表等の資料収集を行った上で道徳授業用に資料化を行い、授業実践を通じて検証する。

### 4. 研究成果

(1) 従来の道徳授業では、指導案レベルでは意見の対立は想定していたとしても、実際の授業では子どもの話し合いの流れによって左右されることは否めなかった。また、理由についても教師が想定していたものが必ずしも子どもから出てくるとは限らなかった。さらに、理由を挙げるだけで時間を費やし、十分な検討ができないまま 1 時間の授業が終わってしまうことも多かった。

そこで、PISA の読解リテラシーを育むために開発してきものが、『「二つの意見」を用いた道徳授業』である。

研究を開始した平成 26 年度当初は、平成 24 年度の実践をベースに研究をすすめていたため、以下の基本パターンに基づく授業を想定していた。

- |  |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>[1] 資料を提示する(資料を読み込む)</li> <li>[2] (教師があらかじめ用意した)道徳的価値を含む対立した二つの意見を「意見文」として提示する。</li> <li>[3] 相違点や共通点など、対立する意見の関係を考える。</li> <li>[4] 自分の考えをまとめる。</li> </ol> |
|--|

しかしながら、授業研究や発表、研究会議を繰り返す中で、主として基本パターンの [2] に関する部分を修正する必要性が生じてきた。一つは「意見文」という用語が国語科でも使用されているために誤解を生じるのではないかという点、もう一つは心情面に配慮する場合は価値の「対立」ではなく、「対比」に近い思考が働いているのではないかという点である。

平成 26 年度の研究をとおして、心情面に配慮した意見文を作成する際には、以下の留意点が必要であることを確認した。

「二つの意見」は、行動面に着目した場合は対立するものもありうるが、心情面に着目した場合は、必ずしも対立関係にあるとは限らない。むしろ、対比的、両義的なものでもありうる。その意味で、「対立する二つの意見」という「対立する」という前提は避けるべきではないか。

心情面に配慮した意見の場合、あえて意見の中に「理由」は明示する必要はないのではないか。というのも、別のクラスで授業を試してみたところ、子どもは自分の体験に重ね合わせて理由も述べてきた。また、意見には「うれしかったから」「悲しかったから」という心情的な理由も示されている。この意味で、心情面に関わる二つの意見には、根拠となる理由を明示しなくても、意見そのものが子どもにとっては考えるための視点として作用しているのではないか。

授業の収束場面においては、二つの意見に共通する道徳的価値を含むキーワードが出てくるような働きかけを構想すればよいのではないか。「泣いた赤鬼」を例にするならば、「うれしい」「かなしい」というベン図等を書きながら、共通する部分を示した上で、「ここに入ることは何か」といった発問を行うことによって、「友情」というような道徳的価値を含むキーワードが出てくればよいのではないか。

以上の仮説に基づいて、PISA 読解リテラシーを育むことをめざす道徳授業である、「二つの意見」を用いた道徳授業の基本的なパターンを、以下のように修正した。

- |     |                                    |
|-----|------------------------------------|
| [a] | 資料を提示する（資料を読み込む）                   |
| [b] | （教師があらかじめ用意した、道徳的価値を含む）二つの意見を提示する。 |
| [c] | 相違点や共通点など、二つの意見の関係を考える。            |
| [d] | 自分の考えをまとめる。                        |

以上の研究成果に基づいて、平成 27 年 6 月に東京学芸大学で開催された日本道徳教育学会第 85 回（平成 27 年度春季）大会において、『二つの意見』を用いた道徳授業の提案 PISA 読解リテラシーの育成をめざして」と題した研究発表を行った。

修正した授業パターンに基づいて作成した「二つの意見」の例を、教材「雨のバス停留所」の場合で示す。

- |   |  |
|---|--|
| <p style="text-align: center;">&lt; A さんの意見 &gt;</p> <p>よし子さんに、ルールを守る子になってほしいと思ったのかな。</p> | <p style="text-align: center;">&lt; B さんの意見 &gt;</p> <p>よし子に、思いやりのある子になってほしいと思ったのかな。</p> |
|---|--|

(2) コールバーグ理論に基づくモラル・ディスカッション等の既存の他の道徳授業モデルとの比較検討に関しては、平成 28 年 7 月に聖徳大学で開催された日本道徳教育学会第 87 回（平成 28 年度春季）大会において、『二つの意見』を用いた道徳授業の提案(2) モラル・ディスカッションとの比較を中心に」と題して、これまでの研究成果に基づいた研究発表を行った。この研究発表の成果をもとに、敬和学園大学紀要第 26 号に「PISA 型道徳授業の構想(4)」として、モラル・ディスカッションとの比較を中心にまとめた。

「二つの意見」を用いた道徳授業と、モラル・ディスカッションとを比較するならば、<表 1> のようにまとめることができる。

<表 1> 「二つの意見」を用いた道徳授業とモラル・ディスカッションとの相違点>

「二つの意見」を用いた道徳授業	<対比する視点>	モラル・ディスカッション
ジレンマ資料以外でも可	資料の形式	ジレンマ資料による
そのまま活用が可能（ただし、「二つの意見」の開発例が必要となる）	既存の資料の活用	後半部分を隠すなど、資料の加工が必要となる
「意見」を視点として参照できる	理由の記述	子ども自身の判断からスタートする
最低限、「意見」を書き写すことで授業に参加できる	考えることが苦手な子どもへの配慮	「べき」「べきでない」「わからない」等の立場を選択するのみ
事前に論点を焦点化することが可能	ねらいとする価値の焦点化	論点がぶれる可能性は否定できない
「二つの意見」の関係に焦点化が可能	一方が少数の場合の対応	教師の配慮が必要
教師が道徳性の発達段階を知っていたとしても、取り上げるべきものを事前にその立場の「意見」の理由として反映することで、どの子どもも授業に参加できる	教師による子どもの発言の判断	子どもの道徳性に基づく発言内容に左右される可能性がある（道徳性の発達段階の高い意見にのみ流されてしまう可能性がある）
「二つの意見」の関係を見いだすことに焦点化が可能	討論の終末場面	「べき」「べきでない」という自身の立場の枠内に留まることが多い
異なる視点、もしくは理由として反映することが可能	心情面等への配慮	基本的には道徳的判断力が重視される
子どもの実態に合わせた「意見」の作り方による（現実的な選択肢を提供することが可能）	子どもの思考の範囲	原則は「べき」「べきでない」のいずれか限定される

なお、モラル・ディスカッションと「二つの意見」を用いた道徳授業を共に実践したことのある教員からは、「モラル・ディスカッションの場合は、最後は『つぶし合い』となってしまうが、『二つの意見』を用いた道徳授業の場合はそうはならない」という報告があった。また、「モラル・ディスカッションの場合は、一見活発なように見えるが、発言する子どもは一部の子どもに偏ってしまうことがあった。しかし、『二つの意見』を用いた道徳授業の場合はすべての子どもが意見を持つことができ、たとえ発言していなくてもしっかりと記述する姿が見られた」という報告もあった。

(3) 「二つの意見」の作成手法を確立するため、平成 27 年度と平成 28 年度に複数回のワークショップを開催し、「二つの意見」の作成マニュアルの改善を行った。ワークショップの開催を通して、「二つの意見」を作成する手法としては、

「中心発問」を定める、

子どもから出てきそうな道徳的価値を含む意見を想定する（あえて、子どもから出てこないものにすることもある）

「二つの意見」に共通点と相違点を入れる、というプロセスが効果的であることが明らかとなった。

また、ワークショップを通じて、次のような知見を得ることもできた。

- a) 「二つの意見」を考えることは、その授業のねらいに関わる「中心発問」と中心的な価値を考えることとなる。
- b) 「二つの意見」を考えることは、子どもたちに考えさせたい、議論させたい道徳的な価値に直結している。
- c) したがって、中心となる発問と予想される子どもの反応をもとに、授業全体を構想することにつながる。
- d) 具体的な作成手法としては、ベン図をもとに考えてみるとわかりやすいようである。つまり、ベン図をもとに共通点と相違点を考えてみると「二つの意見」を構想しやすい。

(4) 平成 28 年度は、明治図書の『道徳教育』誌上において、「コンピテンシーを育成する道徳授業 - 新時代の幕開け」と題して平成 28 年 4 月号から平成 29 年 3 月号までの 1 年間の連載の機会を得ることができた。

特に、7 月号から 12 月号までの 6 号は、研究協力者であり実験授業も行っていた中越道徳教育研究会所属の先生方から執筆していただいた。

この連載における各号のタイトルと執筆者は以下の通りである。

- 4 月号：「考え、議論する」道徳授業の何が問題か（中野啓明）
- 5 月号：資質・能力としての道徳性（中野啓明）
- 6 月号：読解リテラシーを道徳授業で育む（中野啓明）
- 7 月号：「二つの意見」をどう構想したか（山崎 鋼）
- 8 月号：「二つの意見」を用いた道徳授業の実践 1～教材「手品師」を使った授業～（山畑浩志）
- 9 月号：「二つの意見」を用いた道徳授業の実践 2～教材「泣いた赤おに」を使った授業～（土田健太郎）
- 10 月号：全校体制で取り組んだ「二つの意見」（岩澤勝）
- 11 月号：「二つの意見」を用いた道徳授業の実践 3～教材「雨のバス停留所で」を使った授業～（近藤多計夫）
- 12 月号：「二つの意見」を用いた道徳授業の実践 4～非連続型テキストを用いた中学校の授業～（稲田 修）
- 1 月号：「二つの意見」を用いた道徳授業の特徴と課題（中野啓明）
- 2 月号：モラル・ディスカッションとの相違点（中野啓明）
- 3 月号：「非連続型テキスト」を「二つの意見」を用いて授業する（中野啓明）

専門誌への掲載の機会を得たことによって、資料に対応した「二つの意見」を広く公開するという研究目的の一端を果たすことができたといえる。

(5) 図表等を用いた「非連続型テキスト」としての資料の開発と公開を、実験授業を通じて行った。具体的には、上記(4)に示した連載でも紹介した、中学校の『私たちの道徳』掲載されている「人生の目標について」というグラフ、及び小学校の『私たちの道徳』に掲載されている「小学 6 年生に聞きました」というグラフを、作成した「二つの意見」とともに提示するという手法で実験授業を行った。実験授業をつうじて、「非連続型テキスト」であるグラフを用いた資料を、「二つの意見」とともに提示すると、「二つの意見」がグラフを解釈するための手がかりとして機能としていることも確認できた。今後は、グラフそのものにいかに立ち戻っていくか、また、他のデータを子どもがいかに求めていくようにするか、そのための教師の手立てを考えていく必要がある。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 11 件）

中野啓明、PISA 型道徳授業の構想(4)、敬和学園大学研究紀要、査読無、26 号、2017、155-168、

<https://www.keiwa-c.ac.jp/wp-content/uploads/2017/02/kiyo26-9.pdf>

中野啓明、「非連続型テキスト」を「二つの意見」を用いて授業する、道徳教育、査読無、No.705、2017、82-83

中野啓明、モラル・ディスカッションとの相違点、道徳教育、査読無、No.704、2017、82-83

中野啓明、「二つの意見」を用いた道徳授業の特徴と課題、道徳教育、査読無、No.703、2017、82-83

中野啓明、読解リテラシーを道徳授業で育む、道徳教育、査読無、No.696、2016、82-83

中野啓明、資質・能力としての道徳性、道徳教育、査読無、No.695、2016、82-83

中野啓明、「考え、議論する」道徳授業の何が問題か、道徳教育、査読無、No.694、2016、82-83

中野啓明、PISA 型道徳授業の構想(3)、敬和学園大学研究紀要、査読無、25 号、2016、107-123、

<https://www.keiwa-c.ac.jp/wp-content/uploads/2016/05/kiyo25-7.pdf>

中野啓明、「多様な教材」を開発し、ストックしておく、道徳教育、査読無、No.688、2015、68-70

中野啓明、PISA 型道徳授業の構想(2)、敬和学園大学研究紀要、査読無、24 号、2015、115-130、

<https://www.keiwa-c.ac.jp/wp-content/uploads/2015/04/kiyo24-8.pdf>

中野啓明、ノディングズのキャラクター・エデュケーションへの評価、日本デューイ

〔学会発表〕(計3件)

中野啓明、「二つの意見」を用いた道德授業の提案(2) モラル・ディスカッションとの比較を中心に、日本道德教育学会第87回(平成28年度春季)大会、2016年7月3日、聖徳大学(千葉県・松戸市)

中野啓明、「二つの意見」を用いた道德授業の提案 PISA 読解リテラシーの育成を目指して、日本道德教育学会第85回(平成27年度春季)大会、2015年6月28日、東京学芸大学(東京都小金井市)

中野啓明、ケアリング論からの現代道德教育論への評価(3)、日本デューイ学会第58回研究大会、2014年10月5日、同志社大学(京都市)

〔図書〕(計1件)

貝塚茂樹・関根明伸編、教育出版、道德教育を学ぶための重要項目100、2016、全229ページ(中野啓明、学校教育全体で行う道德教育、62-63、学校における道德教育の指導体制、64-65、道德教育推進教師の役割、66-67、幼稚園・特別支援学校における道德教育、110-111)

6. 研究組織

(1)研究代表者

中野 啓明(NAKANO HIROAKI)  
新潟青陵大学・福祉心理学部・教授  
研究者番号：40237350

(2)研究協力者

安井 靖子(YASUI YASUKO)  
中越道德教育研究会・会長